

悪妻なので離縁を所望したけど、
旦那様が離してくれませんか。2

登場人物 紹介

ディルク

ルピナス侯爵の
忠実な従者。

ルピナス侯爵

ロレッタの父。
裏の仕事
請け負っている。

レノス

テルディノス伯爵領で
農園を営む子供。

ルース・
テルディノス

鉄道開通式が行われる
テルディノス領を治める伯爵。
女好きで有名。

エミリア・
フォント

隣国キルベルンの
使者としてやってきた
女性騎士。

アルフレード・
クロイツ

若き公爵で、ロレッタの夫。
王宮騎士団に所属している。

ロレッタ・
クロイツ

毒殺されそうになって
前世を思い出した公爵夫人。
社交界で「悪妻」と
呼ばれている。

目次

悪妻なので離縁を所望したけど、
旦那様が離してくれません。2

後日談 幽霊道中な遺体捜索事件

悪妻なので離縁を所望したけど、
旦那様が離してくれません。2



——クロイツ公爵邸の朝。

ロレッタは、下僕のマークが持ってきた新聞を受け取って、お茶を飲みながら、下らない記事を適当に見ていた。

どこぞの伯爵の結婚や、今度開通式が行われる予定の列車の記事……隣国キルベルン王国では、吸血鬼事件が起きているという都市伝説まがいのことも書かれていた。

「つまらない記事ばかりですわ。吸血鬼なんているわけじゃないですよ」

お茶をこくと飲み干すと、王宮騎士団の制服を着て、同じくお茶を飲んでいるアルフレードをちらりと見た。

あの毒殺未遂事件から、ロレッタとアルフレードは一緒に食事をするようになっていた。

給仕には執事のキーファを筆頭に下僕のジュノとマークがついており、ロレッタが軽く手を上げたら、追加のお茶が淹れられた。

「吸血鬼を信じていないのか？」

「アルフレード様は信じていますの？ 意外ですわね」

「信じるも何も、存在を確認したことがないのだから信じる以前の問題だ」
「それは、信じていないと言うのですわ。そもそも、吸血鬼に噛まれたら牙の歯型が残るのではないのですの？」

ほんの少しだけ、アルフレードが考え込む。

「キルベルンから帰ってきた奴の話では、死体に二つの傷があったそうだぞ」

キルベルンでは鉄道がこの国よりも発展している。この国・アスウェル王国でもテルディノス伯爵領に鉄道を開通させるために、国から視察団を派遣していた。アルフレードはその視察団の噂話を耳にしたらしい。

「それが牙で噛まれた痕ということですか？」

「さあ？　ただ、二つの噛み痕に見える傷があったのは確かだという話だ。失踪者もいるらしいが……死体で見つかることが多いらしい」

「ふーん……チュパカブラでも出たのかしら？」

「なんだ、それは」

「UMAウマですわ」

「……意味がわからん」

「未確認生物ですの」

「未確認なのに、なぜ、名前があるのだ」

「そこにロマンがあるのですわ。信じるか信じないかはあなた次第ですわ」

「まったくロマンは感じないが」

「まあ、どちらでもいいですわ。私には関係ないですし」

新聞を横に差し出すと、サツとジュノが受け取る。そうして朝食が終わり、アルフレードは仕事へと行くために席を立った。

「ロレッタ……休暇の申請をした。一ヶ月ほど休みを取ろうと思う」

「好きになさればいいではありませんの」

「ちよつとは俺のことを気にしてくれ。出かけたのだ」

「どこかにでも行く気ですか？」

「ロレッタと新婚旅行に行きたい」

「新婚旅行？　私と？」

一緒にと言われて、ロレッタのお茶を飲んでいた手が驚きで止まる。

「ダメか？　船旅もいいと言っていたらどう？」

「それで、一ヶ月も？」

「すぐには帰ってこれないからな。まだ先になるが……近々開通する鉄道に乗って、港へ行こう。そのまま船旅へ出るのはどうだ？」

ちよつと嬉しい。ちよつとどころではないかもしれない。アルフレードは、ロレッタが言った何気ない一言を覚えていたのだ。しかも、新婚旅行。

アルフレードから初めて誘われた旅行が新婚旅行で、ロレッタの胸が高鳴った。

「だけど、意地っ張りな性格のせいで素直に嬉しいとは言えない。」

「なぜ、無言になる？」

「鈍感なあなたには、わかりませんわ」

嬉しくて、自然と笑みを作りそうな頬の筋肉を押さえてロレッタは言った。

アルフレードが座ったままのロレッタの手をそっと取った。そして、名残惜しそうに口づけをする。

「では、行ってくる」

甘い仕草に戸惑いつつも、そんな様子など微塵も表に出さないロレッタは、出勤するアルフレードを見送った。



王宮騎士団の執務室で仕事をしているアルフレードに、腹心のセオドアが王太子ライナルトからの親書を持って報告に来ていた。

「鉄道？」

「近いうちに、テルディノス伯爵領で開通される鉄道です。そのためにキルベルン王国から騎士数人が使者として来られていますので……開通式にライナルト殿下が出席するから、アルフレード様が護衛につくようにとのご命令です」

「俺は休暇の申請をしたのだが……」

なぜ、休暇を申請したのに仕事が降ってくるのだと、アルフレードはイラツとした。

「……ハッキリ申しますと、休暇申請は棄却されました。先日も一ヶ月休んでましたから、次の休暇が取れるのももう少し後になるかと。それに、テルディノス伯爵領の当主は王宮騎士団の一員でもあるので、アルフレード様は絶対に出席するように、とのお達しです」

「テルディノス伯爵がいるなら、俺は関係ないだろう。彼が殿下に付けばいい」

「彼は、その日は領主としての役割がありますから。それに、ライナルト殿下はアルフレード様をご指名です。領主とはいえ、王宮騎士団の一員である彼がアルフレード様を差し置いて、ライナルト殿下に付くわけにはいきません」

同じ王宮騎士団なら、公爵が伯爵の下に付くな、とセオドアが暗に言う。

「ライナルト殿下からは、『嫌なら、すぐに王宮騎士団の団長に取り上げるか？』との言伝でも承っております」

そんなことをすれば、ただでさえ忙しいのに、今以上に忙しくなる。

王宮騎士団の団長ともなれば、嫌でもライナルトと開通式に出席しなければならぬ。

どちらをとつても、鉄道開通式でライナルトの護衛をする選択肢しかなくて、アルフレードはため息をついた。

「アルフレード様。どうでしょうか？ ちなみに、キルベルン王国の使者団はすでにテルディノス伯爵邸に滞在しております」

ずいぶん早い到着だと思いが、それならば後回しにもできない。

「わかった。では、俺が先にテルディノス伯爵領に下見に行く。ちょうど別荘も買ったばかりだ。ロレッタと一緒に戻ってくるが……鉄道開通式が終われば、必ず休暇を認めてもらう。それなら、任を引き受ける」と伝える」

「はい。では、ライナルト殿下にはそうお伝えします」

なかなか休みが取れない。おかげで、ロレッタと未だに初夜を迎えられずにいる。

新婚旅行のために休暇の申請をしようと思えば、新しい仕事がやってくる。

憂鬱だ。ロレッタの行動が読めないから、彼女から目も離せない。

「また、テルディノス伯爵領に行くのか……」

アルフレードが嫌そうに呟いた。

◇◇◇

——数日後。

テルディノス伯爵領の別荘をロレッタとアルフレードは二人で訪れていた。

ロレッタと二人の時間を過ごすために早めに来たのだが、ロレッタが無謀にも料理の食材を買い回しと言いだした。

（未だに、できもしないスローライフをやるうとしているのか。しかも、一度は飽きたと言ったく

せに……）

一体、今度は何を作るつもりなのかとアルフレードは呆れた。しかし、ロレッタは一度言い出したら聞かない。

二人で街に出ると、ロレッタは使い切れるのか怪しいほどたくさんの食材を買い求めた。

「ロレッタ……こんなに買い込む必要があるのか？」

「明日は買い物に行きませんし、パンは長持ちしますわよ？」

「硬くなるだろ……」

「硬くなったパンは、卵とミルクに浸して焼けば大丈夫ですわ。問題はありませんわね」

「なんでそんなに料理をしたがるのだ？」

それは、アルフレードに美味しいと言ってもらったためだけだ、鈍感な彼は気づかない。

ロレッタがジッとアルフレードを見上げると、アルフレードは彼女の視線に気づき、不思議そうな顔をした。

「なんだよ」

「はあ、鈍いあなたには言いたくありませんわね」

「鈍くて悪かったな」

無表情のまま、両手いっぱいパンや野菜の入った紙袋を抱えているアルフレードと一緒に、ロレッタは石畳の道を歩いていた。

「フレンチトーストなら、硬くなっても大丈夫ですわ」

ロレッタの前世の記憶は意外と役に立っているだけ……
(問題は、このロレッタである私の不器用さにありますわ!!)

今度こそ料理を成功させたいとロレッタは思うが、アルフレードは疑いの眼差しで食材を睨んでいた。

「どこでそんな知識を……」

「秘密ですわ」

アルフレードが呆れる。

ロレッタは前世の記憶があることを、アルフレードにも秘密にしていた。

記憶が戻ってから雰囲気が変わったとは薄々感じているようだけど……別に言う必要はない。

(夫婦に秘密があっても問題ありませんわ)

ロレッタがそう思いながら辺りを見回していると、アルフレードが優しく話しかけてくる。

「次は何がほしいんだ？」

「果物がほしいですわね」

「果物？」

「ええ、とつても作りたいものがあるんですの」

ロレッタは楽しそうに胸の前で両手を合わせて言った。

その時、前方からスーツ姿のいかにも貴族風な青年が杖を片手に歩いてきていた。その杖が、建物の陰から突然走って出てきた男の子の足を引っ掛けた。

「……っわ!？」

声を上げて転んだ男の子が持っていた籠からオレンジがいくつも転がり、カツンと金属音が微かにした。同時に、貴族風の青年がぐしゃりとオレンジを踏んでしまい、辺りにオレンジの果肉が果汁と共に飛び散った。

オレンジを踏んでしまった青年は驚いたように固まってしまふ。

アルフレードは、両手いっぱい荷物を地面に置いて、転んだ男の子の前に屈んだ。

「大丈夫か？」

「ぼ、ぼく……」

踏まれて地面に広がったオレンジは、果肉の色が濃く、橙色を通り越して血のように赤い。そのうえ、みずみずしい。柑橘の甘酸っぱい匂いが辺りに広がった。

「……すごいわ」

ロレッタは思わず呟いた。ロレッタの足元に飛び散ったオレンジの果肉と果汁がドレスの裾を濡らしていた。その様子を見た青年が大袈裟に近づいてきた。

「ご令嬢。大丈夫ですか!？」

「見ての通りですけど？」

「ああ、失礼しました。美しいご令嬢になんてひどいことを……こちらをどうぞ」

ロレッタが裾を持ち上げながら淡々と返事をする、青年は心配そうにハンカチを差し出してくる。

アルフレードはオレンジを拾い上げながら、またロレッタに男が言い寄ろうとしていると思ひ、警戒心を見せた。

「まったく……！　なんて礼儀のない……！　お美しいご令嬢。よろしければ、俺の馬車でお送りしましょう。こんなに汚れていては帰れないでしょう？」

ロレッタにハンカチを差し出したまま、転んだ男の子を見下した態度で言う青年が一步ロレッタに近づくと、アルフレードが彼女の前に立ちはだかった。

「それ以上、妻に近づくな。それと、子供が転んだのは貴様の杖のせいだぞ」

「は……？　従者ごときに貴様呼ばわりされるいわれはないが？」

「誰が従者だ！」

青年が偉そうに言うのと、アルフレードが声を荒らげて突っ込む。すると、青年はアルフレードの顔をまじまじと見て驚愕した。

「ア、アルフレード!？」

「お知り合いですの？」

「さあ……知り合いか？」

ロレッタに聞かれてアルフレードが首を傾げた。

「同じ王宮騎士団にいるだろう!!」

「部隊が違うなら知るわけない。大体、貴様こそ俺を従者だと言っただろう！」

ロレッタの荷物持ちをしていたせいで従者と間違えられたアルフレードが大声で言い返せば、負

けじと青年も声を張り上げた。

「キルベルン王国へ留学した時も、一緒だったぞ!!」

「記憶にない。だいたい、俺は飛び級だ」

「だから、同じクラスだったんだろう！　俺の方が年上だぞ！」

「しかし、名前も覚えがない」

「こんな男、同級生にいたか？　と考えながらアルフレードが言う。

「ルースだ！　ルース・テルディオノス！　覚えてろ！」

「テルディオノス？　この領主の？」

「そうだ。思い出したか！」

まったく思い出さないアルフレードに、ルースが鼻息を荒くする。

長めの襟足を結んだ茶色の髪と同じ茶色の瞳。スーツが似合うすらりとした高身長の彼が、このテルディオノス伯爵領を治めている領主ルース・テルディオノス伯爵だった。

ルースがアルフレードのように他国にいて、あまり国内の社交の場に出ていなかったからだろう。

そして、どうやら二人は同じ時期に留学していたらしい。

「……あなた。そのハンカチは使っていないのかしら？」

息を荒らげているルースにロレッタが問いかけると、彼はころりと態度を変えた。

「もちろんですよ。美しい方」

「そう。では、使わせていただくわね」

ロレッタはこりとしてハンカチを受け取り、この状況にどうしていいのか困惑気味の男の子の前に座り込んだ。

「お膝を擦りむいているわよ。これで手当てしておきなさい」

「ええっ!? こ、こんな高そうなハンカチ……っ」

ロレッタがハンカチを差し出すと、転んだ男の子は上ずった声で慌てて拒否をする。

「ご、ご令嬢……」

「大丈夫よ。一点物ではないみたいですし、使ってもいいと持ち主が言ったのよ。ねえ、そうよね?」

立ったままで狼狽うろたえているルースに、ロレッタが語尾を強めてたずねた。

「も、もちろんです」

「ほら。持ち主がそう言っているのよ? 大体、ハンカチ一枚施して困る貴族なんかいないわ。それとも、特別な想いのあるハンカチだったのかしら? それなら、考慮してあげてもよろしくてよ?」

「ふ、ふふ……そんな、狭量せうりやうな男ではありませんよ」

「だったら、もつとにこやかに言ってくださいな」

引きつった顔で変な笑い声を出されてもうるさいだけだと思いつつ、目の前で恐縮したままの男の子の膝に、ロレッタはハンカチを迷いなく巻いた。

男の子はおそれ多いのか、微かに震えている。

「だから、勝手に妻に近づくな。彼女は令嬢ではない」

「妻? こ、この美しい方が!？」

「先ほどから言っているだろう!」

声は荒らげないまでも、力を込めてアルフレードが言う。

ルースはロレッタとアルフレードを交互に見たかと思うと、何か考え込み始めた。

そんなルースを気にすることなく、ロレッタは地面に転がるオレンジに釘付けだった。

「ねえ、あなた。このオレンジはどこで買えるのかしら?」

「こ、これは、その……僕が育てたもので……まだ、よその店には……」

「出回ってないの?」

歯切れ悪く男の子が何度も首を縦に振った。

潰れた果肉は橙色よりも濃い赤で、前世で言うブラッドオレンジのように見える。日の光を反射してきらめくオレンジをロレッタは拾った。

「じゃあ、私にこれ売ってくださいな。食べてみたいですよ」

「きよ、今日の分はこれだけで……あのつ、領主様にお届けする分しかなくて……」

「あら、ないの? 残念ねえ……果物が食べたかったのに……」

(みずみずしくて美味しそうなのに……しかも、この色。完璧ですよ)

ロレッタがオレンジに夢中になっていると、頭の上ではアルフレードとルースが何かを話して

いる。

「……本当にこの美人が……」

「だったら、なんだ」

二人が睨み合っていると、ルースを追って女性がやってきた。

「ルース！ 手配がすんだわ。時間は……きやあ！ なんなの、これは。汚いわ！」

やってくるなり、女性が目の前の潰れたオレンジを見て叫んだ。

汚らしいものを見るような目で子供を見た女性の声に、ルースがハッと息を呑む。眉をひそめた彼女は、そこでアルフレードに気づいた。

「アルフレード様？ まさか、アルフレード・クロイツ様では！」

黄色味の混じった茶髪に茶色の瞳の女性は、アルフレードに近づいて嬉しそうに話しかけた。

「……君は……確か……」

誰だっただろうかと思いつき出そうとしながら、自信なさげにアルフレードが言う。

「覚えてらっしゃいましたか。嬉しいですわ！」

覚えているかどうか怪しい雰囲気のアフレードなど気づきもせず、女性は両手を合わせて喜んだ。

「キルベルン王国騎士団に所属しているエミリア・フォントです。おひさしぶりですね」

ニコニコとするエミリアを見て、せっかくオレンジを見ていた楽しい気分を台無しにされて苛ついたロレッタが立ち上がり、鋭い視線を向けた。

「アルフレード様が覚えているわけじゃないですわ」

「余計なことを言うな」

覚えていないことを指摘されて、アルフレードは慌ててロレッタを止める。

「なんですか、こちらは？ アフレード様のご親戚ですか？」

アルフレードへの好意が明らかに見られるエミリアがロレッタに不快感を示せば、余計にロレッタの癪かたまりに障さわった。

睨むエミリアに、負けじとロレッタが目吊り上げた。そして、拾い上げたオレンジを「持っていなさい」と言っ子供に渡し、腕を組んだ。子供は恐縮してオレンジを受け取り、どうしたものかとおろおろしている。

ロレッタとエミリア、二人の間に火花が散った。

不穏な空気に気づかないアルフレードは、ロレッタの肩に手を回して抱き寄せる。

腕を組んだまま、ロレッタは勝ち誇った顔でアルフレードにもたれた。

「親戚ではない。こちらは妻のロレッタ・クロイツだ」

「妻？ ご結婚を!? アルフレード様が!？」

エミリアがぼかんと口を開ける。

「そうだが……帰国してすぐに結婚をしたんだ。君はなぜここに？」

「私は、鉄道開通式の先行部隊としてアスウェル王国にやってきました。まさか、アルフレード様にお会いできるとは思っていませんでしたけど……」

「ああ、君が鉄道開通式の……では、手配とは鉄道開通式の関係か？ それなら、俺も話を伺いたいのだが……」

エミリアが一瞬だけ、ピクリと肩を揺らした。

「……あれは、ドレスの手配の話ですわ。夜会にはドレスが必要ですよ」

まるで、何かを誤魔化すようにエミリアは笑う。

キルベルンとテルディノス伯爵領を繋ぐ鉄道の開通式に先立ち、キルベルンからも使者が来ている。そのため、アスウェル王国も準備に追われていた。

さらに、鉄道にはクロイツ公爵家やルビアス侯爵家も含め多くの貴族が投資している関係で、鉄道開通式には多くの貴族たちが招待されている。

クロイツ公爵家の当主であり、王宮騎士団の一員として式では王太子の護衛を務めるアルフレードも、もちろん準備で忙しくしている。

「でも、なぜアルフレード様が式のお話を……？」

「ああ、俺が鉄道開通式の護衛責任者の任に就いたんだ」

「まあ、嬉しいですわ。ここでお会いできたのも、きつとご縁があるんですわね。私は、しばらくはテルディノス伯爵邸に滞在しますの。よろしければ、今度山鳥でも狩りに行きませんか？ 私の弓の腕前はご存知でしょう？」

数秒記憶をたどってもエミリアの弓の腕前など思い出せないアルフレードは、無言で流そうとした。

「あなたのことを覚えていないのに、弓の腕前なんてアルフレード様が知っているわけはないですよ？ 記憶をしっかりとらなされた方がよろしいのではなくて？」

「……っそんなわけないでしょう。私は、山狩りの大会で優勝したのよ！」

淡々と嫌味を言うロレッタに、エミリアが震える手をグッと握りしめて答える。

ロレッタがアルフレードを見上げれば、彼は表情を変えないまま、しかし絶対に覚えてないだろう曖昧な雰囲気あいまいで相槌を打った。

「……そうだな。今回は時間がないから無理だ。悪いが狩りは遠慮させてもらいたい。鉄道開通式が終われば、俺たちはすぐにクロイツ公爵邸へ帰る予定だ」

「まあ、残念ですわ……そうだな。じゃあ、アルフレード様も夜会へ出席なさって。ねえ、テルディノス伯爵。いいでしょう？」

エミリアが嬉しそうにルースの腕に手を添ぬえて強請ねだる。どう見ても、アルフレードとの交流を期待している。

「アルフレード様に興味があるの？ でも、先ほどはルースと呼び捨てにしましたわよ」

「あなたは黙ってなさい！」

親しげにファーストネームで呼んでいたのに、アルフレードの前だと態度を変えるエミリアをロレッタが「ケツ」と鼻で笑うと、エミリアはぴしゃりと言り返す。

「テルディノス伯爵。お誘いしても、いいですわよね」

「そ、そうだな」

ロレッタとエミリアのやり取りに困惑したのか、ルースが声を上ずらせながら、子供の頭を撫でていた。撫でられて、子供はさらに帽子を目深に被った。

「恋人同士の間はしませんことよ。恋人に見えませんが……デートなのではなくて？」

「エミリアは、恋人では……キルベルン王国から鉄道開通式の使者として来ているので、テルディノス伯爵領内を案内していただきます。それだけの関係です」

「せっかくなので、テルディノス伯爵が領地の街を紹介してくださいましたのですわ」

恋仲ではないと強調して否定した二人に、妙な関係だとロレッタは訝しむ。

「ただの案内の途中にドレスを買い求めるんですの？ ドレスの手配って言っていましたから、もしかして贈り物かしら？」

「ちよつとしたプレゼントですよ。はは」

「わかりますわ。私も、要らないプレゼントを多々贈られてきましたの。男性はちよつとしたプレゼントをしたがるものですね」

「そ、そうですか」

ロレッタが結婚前の過去を思い出して、ルースに共感する。

テルディノス伯爵家はそれなりの資産家だった。ドレスを軽く贈れるほどに。

そして、ルースはロレッタに向かって跪き、キリツとした表情で話し出す。

「申し遅れました、ご令嬢。俺はルース・テルディノス伯爵と申します。よろしければ、お詫びに本日の晩餐と。明後日の夜会に招待いたします」

「晩餐？」

「はい。ぜひ」

「あなた。晩餐に招待されますわよ？ どうなさるの？」

ロレッタがぐるりと男の子の方に振り向いた。今にも失神しそうなほど驚いた男の子は、ものすごい速さで両手を左右に振った。

「ええっ!? ぼ、僕ですか!? む、無理です！」

「ご、ご令嬢……っ!?」

ルースは顔を引きつらせている。

「ロレッタ……子供を困らせるな」

アルフレードも困り顔で、額を押さえた。

「まあ、失礼ね。私、困らせたりなどいたしませんわよ？」

「困っているんだよ。……ルース・テルディノス。貴殿が、テルディノス伯爵家の当主だな」
「そうだ。この子供の農園も我が領地のものだ」

「元々明日何う予定だったが、挨拶もかねて夜会には参加させてもらおう。だが、申し訳ないが晩餐は遠慮させてもらいたい。ロレッタもいいな？」

「仕方ないですわね……」

ここは、テルディノス伯爵家の領地。ロレッタは挨拶もする気はなかったけど、アルフレードは仕事で来ているから、明日にでも挨拶に行く予定だった。

それに、アルフレードはこの子供の困り具合を気の毒に思つて、この場をお開きにさせたかっただらう。

「では、夜会でお待ちしております。お美しい方」

「そうさせてもらう。それと、この子供の農園がテルディノス伯爵領のものなら、このオレンジは持つて帰つてやれ」

ルースはロレッタに言ったのに、彼女の前に立ちふさがったアルフレードが返答した。

「くっ……わかつている。そのつもりだった」

ルースは、お前に言ったのではない、と言いたげに拳を握つた。

「さあ、お前はもう帰りなさい。果物は俺が持つて帰ろう」

「は、はい！」

ルースが子供から果物の入った籠を受け取ると、子供は被つていた帽子を押さえて走り去つていった。

「お美しい方。こちらを」

籠の中から、ルースがロレッタにオレンジを三つほど渡す。

「あら、いいのかしら？」

「残りは、夜会で使いますが……」

「まあ、嬉しいわ」

無事だったオレンジを三つほどロレッタが受け取ると、アルフレードは、そのオレンジを眉を吊

り上げて見た。そして、近づいてきたルースがアルフレードの胸に拳を当てて言う。

「必ず来てください。アルフレードも、必ずだ」

ずいぶんと念入りに諭すような言い方だった。

「アルフレード様。またお会いできますわね。楽しみにしてますわ」

エミリアが頬を染めて言う。

「ああ、ではまた。行こう。ロレッタ」

「ええ。では、失礼いたしますわ」

そうして、ルースとエミリアに見送られてロレッタとアルフレードはその場を去つた。



——翌日。

アルフレードは、朝食が終わつて早々に郵便屋へと出かけた。

クロイツ公爵邸と王宮騎士団に手紙を出すらしい。色々忙しい人だと思ひながら、ロレッタは別荘でのんびりと過ごしていた。

静かな別荘の窓から光が差す廊下を、ロレッタは清々しい気持ちで歩いてた。

料理人たちが到着するのは夕食前。急遽仕事で別荘に来たから、使用人たちは準備を整えてから遅れて来ることになっている。だから、まだ別荘には二人つきりだった。

「もしかして、二人でいたかったのかしらね……」
まさかと思いながら、ロレッタはアルフレードを想い一人呟く。そう考えると、少しだけ照れてしまう。

「でも、まさかですわね。それよりも、今がチャンスですわ！」

ロレッタは一人でいるうちに料理をしてやろうと、腕まくりをして厨房へ向かった。玄關ホールにさしかかった時に、玄關の扉を誰かが叩いた。

「お嬢様！ おられますか？ お嬢様——！」

この声はディルクだ。ということは……

扉を開けると、そこにはディルクと、思った通り父親であるルビアス侯爵も一緒に立っていた。

「なんですか？ 来るなら、手紙の一つでも寄越してくださいな」

「手紙を出せば、私がここに来ることがバレルかもしれないではないか」

「怪しいですわ」

「冗談だ。娘の顔を見たかっただけだ」

余計に怪しい。

ディルクまで連れてきているのだ。いや、ディルクはいつも一緒だけでも……

「アルフレード殿はどうした？」

「さあ？ お手紙を出すと行って郵便屋に行きましたわ。そろそろ帰ってくるのではなくて？」

そう答えながら、ロレッタはルビアス侯爵とディルクを招き入れる。

「お茶を淹れますから、先に居間にでも行ってくださいな」

「お茶はディルクに淹れてもらおう」

ルビアス侯爵が、嫌そうな顔できっぱりと断る。

「不味くはありませんわよ」

「お前の茶はいらん。私は自分の胃が大事だ。それに、娘の顔を見に来たと言っただろう？」

「怪しさいっぱいですわ」

「勘がいいな……そういうわけだ、ディルク。温かいお茶を頼むよ」

「はい。旦那様」

その笑顔が怪しい。それでも、わざわざやってきた父親を追い返すこともできない。

二人で居間へ向かうと、杖を足の間に立てたまま腰かけたルビアス侯爵とロレッタは向かい合わせに座った。

「で、何をしに来たんですの？」

「別荘でどう過ごしているか気になっただけだ。可愛い娘のことなら、気になるものだ」

「だから、可愛いなど思ってもないでしょう」

「そんなことはない。ひどいな、ロレッタ」

「ひどくありませんわ」

「傷つけたお詫びに、私の願いを聞いてほしいものだな」

「嫌ですわ」

「嫌ですわ」

即答するロレッタに怯むことなくルビアス侯爵が話を続ける。

「身も蓋もないな……ご褒美もやるぞ。困っている父親を助けてくれないか？」

ルビアス侯爵がここまでロレッタに食い下がるのは珍しい。

何か特別な事情があるのだろうか。

「どうしてご自分でされないのですの？」

「私には向いていない。だが、頼まれてな……頼んできたのは、隣国キルベルン王国の貴族ブリアティルト男爵だ」

「まったく知りませんわ」

ルビアス侯爵家は、時折表沙汰にはできない仕事を頼まれることがある。それを引き受けて、裏で莫大なお金を受け取っていた。

裏で何をやっているかわからない、狡猾なルビアス侯爵家と呼ばれるのは、そのせいだった。

（お父様も、クロイツ公爵家も、キルベルンとアスウェル王国を繋ぐ鉄道に出資しているはず……）

その関係でテルディノス伯爵領へやってきたのかと思っただけれど、どうやら違うらしい。

「ご自分でなさればよろしいのに」

「頼まれたのはここ、テルディノス伯爵領での仕事だ。せっかくロレッタがいるのだからな。お前が適任だ。なに、簡単な仕事だ。テルディノス伯爵邸から取ってきてほしいものがあるだけだ」

「それだけですの？」

「そうだなあ……」

……確かに、この別荘はテルディノス伯爵領にあるから、ロレッタが領内においても不自然ではない。
怪しさいっぱいの黒い笑顔は気になるが、ルビアス侯爵はいつもそうだ。そして、夜会の招待状を懐から差し出してきた。

「テルディノス伯爵邸からあるものを取ってきてほしい。警備がかなり嚴重だから、夜会に出席するのが自然だろう。招待状は手に入れたから、お前にやろう。それでテルディノス伯爵に会ってくれないか？」

「だから、なぜ、私が？」

「テルディノス伯爵は女好きで有名なのだ。お前が行けば、必ず声をかけてくるはずだ」

それは、昨日会ったあの男ではないかしら？

「昨日、私に夜会のお誘いをしてきた男ね……」

「なんだ、誘われていたのか。なら、苦勞して夜会の招待状を手に入れる必要はなかったな。やはり、お前が適任だ。テルディノス伯爵は美人が好きなのだよ」

ルビアス侯爵が美しいロレッタを見て笑顔を見せる。

「ええ、まあ……せっかく招待状を手に入れたのに、役に立ちませんでしたわね。でも、苦勞して手に入れるほどの夜会ですの？」

「かなり警備が嚴重だと言っただろう……警戒しているのだ。そのおかげで、信用のある者しか邸には招かれてないのだよ。今はキルベルン王国の使者が出入りしているしな」

そんな時に、偶然出会ったアルフレードとロレッタはすぐに招待された。なぜ？ 少しだけ、ロレッタは怪しんでしまう。

「アルフレード様は、信用されているということかしら？ まあ、私が美人だということも多大に加味されたと思いますが」

「アルフレード殿も招待されたのか？ 同じ王宮騎士団所属だからか？」

「ご学友とか言ってみましたわ。同じ学院にいらしいですね。でも、アルフレード様は覚えていませんの」

「テルディオス伯爵もキルベルン王国に留学していたから、アルフレード殿と同じ学院だったのはそのタイミングだろう。覚えていないのは、アルフレード殿が飛び級ですぐに卒業したからだな。

同じ王宮騎士団員でも、年下のアルフレード殿の方が先輩に当たると思うぞ」

「そうなんですの？」

ロレッタは顎に指を当てて考える。

思い返せば、必ず来てくださいとか言っていた気もする。何やら真剣な眼差しで。

「ふむ……だが、これで自然にテルディオス伯爵邸に入れるな。頼んだぞ、ロレッタ」

「まだ行くとは言ってませんわ」

ロレッタが不貞腐れたように腕を組んで睨むと、ちょうどいいタイミングでディルクがお茶を持ってきた。ルビナス侯爵は出されたお茶を、なんの警戒もなく飲む。ディルクは、お茶を淹れるのも上手だ。

「……まあ、別荘をタダでくださいましたから、聞いてあげてもいいですけど……」

「それは、助かる」

「でも、あるものでは、わかりませんわ」

「手に入れてほしいのは、ブリアティルト男爵の娘の忘れ形見と、密書だ」



——さらに翌日、夜会の当日の昼。

「俺の仕事が終わって戻ってくるまで、待てないのか？」

「なぜ、待つ必要があるのかしら？」

ロレッタは、仕事に出かけるはずだったアルフレードと一緒にテルディオス伯爵領内の街まで馬車に乗ってやってきた。馬車から降りようとすると、彼が手を差し出してくる。

「アルフレード様は、お忙しいのではないのですの？」

「確かに忙しい。鉄道開通式の下調べも必要だし、やることは山のようにあるが……ロレッタが一人で歩くのは危険だ」

何が危険なのかと、ロレッタは呆れる。

「街を歩くぐらい一人で大丈夫なのに……誰が、私に手を出せると思うのですの？」

「うるさい。絶対にダメだ」

「私、買いたい物がありますのよ。果物がほしいのですの」

「買い物はいいが……とにかく、この辺りから離れるなよ。いなくなったら、捜索隊を出す」
「どうせ、見つけれませんわ」

(私を見つけることができるのは、アルフレード様だけなのですけどねえ……)
「じゃあ、俺は鉄道開通式の準備に行くが……聞いているのか？」

果物屋を探そうと辺りを見回すロレッタを見つめながら、アルフレードが心配そうに言う。
「どこかで見た顔が近づいてくるわねえ」

「は？」

ロレッタの視線の先にアルフレードも視線を移せば、騎士服に身を包んだエミリアがこちらに近づいてきていた。

「ああ、彼女は今から鉄道開通式の打ち合わせも兼ねて一緒に現場へ行く予定なんだ」

「ふーん」

「気になるのか？」

「私は今、果物のことで頭がいっぱいでしてよ」

ちよつとは気にしているのかと思えば、予想外の言葉が出てきてアルフレードは頭を抱える。

「アルフレード様！ お待たせしましたかしら？」

「そう思うなら、走ればいいじゃないですか？」

「あなたは待たせていません！」

エミリアは到着するなり、失礼なロレッタの発言に拳に力を込める。

「エミリア、気にしないでいい。俺たちも今来たところだ」

「まあ、優しいアルフレード様」

アルフレードの言葉にエミリアが気を良くして身体をくねらせれば、ロレッタがツンと顔をそらした。

「本当に今来たところですよ。あなた、男性の取り繕いの区別もつきませんか？」

「あなたは黙っていなさい。それに、アルフレード様と来ても一緒に連れていきませんわよ。引っ込んでなさい」

「そもそも、一緒に行くつもりはありませんわよ」

ロレッタはケロツとした顔で言い返す。

「お黙りなさい！ 行きましよう、アルフレード様。付き合いきれないわ」

怒ったエミリアは、アルフレードの腕に手をかけて歩き出した。

図々しいと思いつながらロレッタが腕を組んで二人の背中を見送ると、アルフレードがエミリアの手を振り払ってロレッタのそばへ戻ってきた。

「ロレッタ。行ってくる。すぐに仕事を終わらせて、必ず迎えに来るからな。待ち合わせ場所はここだ」

そう言って、アルフレードがロレッタの頬にそっと口づけをする。

(驚いたわ。アルフレード様が人前で前触れなくキスをしてくるなんて……)

ロレッタは思わず照れてしまうのを隠そうと、唇を尖らせた。
「遅くなるかもしれませんがよ?」

「いい。来るまで待つから……では、行ってくる」

ちよっとだけ甘い声のアルフレードにロレッタは戸惑う。エミリアと去っていく彼は、もうエミリアに触らせてはいなかった。

「腕を組まれてイラッとしたのを気づかれたのかしら? 私としたことが……まあいいですわ。レモンを買わないと」

気持ち切り替えて、ロレッタは買い物しようとして街を歩き始めた。

果物を扱っている店にたどり着くと、レモンは数が少なく、ほとんど売り切れだった。

「果物が少ないのね。テルディノス伯爵領は果樹園が有名だったはずなのに」

まばらに並べられた果物を覗き込みながらロレッタがため息をつく。店先には、しわしわの顔に伸びきった白い眉毛が目隠している老齢の店主が杖を持ったまま座っていた。

「今夜の夜会で使うと、ほとんどテルディノス伯爵様が買ってくださいました……」

お酒にも料理にも果物は使うから、仕方ないといえば仕方ない。

「それにしても、この街は柑橘系の果物が多いのね」

「ええ。明日には、またたくさんおろされますよ。ああ、ほら、あの子のところのオレンジも味がよくて、お勧めですよ」

老齢の店主が手で示す先を振り向くと、そこにいたのは昨日の男の子だった。

男の子は、ロレッタを見るなり頬を赤くしてペコリと頭を下げた。

「あら、昨日の……」

「ちよっどいいところに出くわしたわね。やはり、私は日頃の行いがいいのかわ」

「ふふふ……」

「あ、あの、奥様……?」

男の子が、怪しい笑い声を零すロレッタに引いていると、果物屋の店主が彼に話しかける。

「こちらの奥様がレモンをほしがっているんだ。よければ届けて差し上げてはどうだ?」

「レモンなら、すぐにお届けします」

「本当ですか?」

「はい! どれくらいお届けしましょうか?」

男の子は背負っていた籠を下ろして、店主に果物を渡した。籠の中はオレンジでいっぱいだった。オレンジがコロンと転がり出ると、店主が腕を伸ばして手探りをしている。

「お目が……」

「ええ、元々視力が弱いもので……歳のせいかな、最近は特に見えなくて。お客様には申し訳ない」

「ふーん。でも仕事ができるのですから、問題ないですわね。だけど、お目が悪いのに、この子の果物だとわかりますの?」

「親の代から、おろしておりますから……それに、子供が一人で配達するのは、この子の農園だけです」

「そうなんですの。えらいのね」

そう言つて、転がったオレンジをロレッタが拾つた。

「これは、昨日のオレンジかしら？」

「えつと……違うと思います。でも、すごく甘いんです」

男の子が照れながら答えると、店主が「少し切つてやりなさい」と勧めた。

「……すみません。果物ナイフをなくしてしまいました……」

「いつも持ち歩いていたの？」

「売りに出す時は、少し切つて食べてもらうこともあるので……」

ロレッタは腕を組み、右の人差し指を顎に当てて聞いていた。

「あれは、古かつたからな……そろそろ替え時だっただろう。気にするな。親の形見だと言つていたが、お前が元気なら両親も悲しむことはないだろう」

「……形見？」

男の子が呆けたように繰り返し、そして悲しげに俯いた。

「では、私を農園に案内してください」

「は、はい！」

「いい返事ですわ。すぐに辻馬車に乗りますわよ」

「つ、辻馬車!？」

「当然ですわ。私にこれ以上歩けと言うのですの？ お断りですわ。さあ、ついてきなさい」

「は、はい……？」

「返事は、はつきりとするものですわ」

「はい！」

こうして、ロレッタを農園に連れていくことになった男の子は、てつきり自分が案内するものと思つていたのに、ついてきなさいと言われてしまい、困惑しながらも辻馬車に乗つた。

「そう言えばお名前を聞いてなかつたわね」

「は、はい！ あの……レノスです」

「きちんと名乗らないとダメじゃない。私はロレッタよ」

「す、すみません、奥様！」

ロレッタの隣に座つたレノスは、農園に着くまで緊張しっぱなしだった。

レノスの農園は、古いながらもそれなりに広い。農園の隅には、古臭いレンガ造りの家があった。あなた……こんなに広い農園を一人で管理しているの？」

「ええと……収穫期は、手伝いを呼びます。両親が亡くなつたばかりでなので……」

元々、両親がいた頃から収穫期は人に手伝いに来てもらつていて、今もそれは続いているようだ。果物屋の店主ともいい関係を築いていたように見えるし、周りの大人に助けられているのだろう。しっかりした、真面目な男の子という印象だった。

「家にレモンも置いてますし、オレンジもあります。よかつたらそちらを持って帰りますか？」

「ぜひ、見たいわ」

レンガ造りの家へ向かうと、玄関の外には農具や木の桶などが置いてあった。ロレッタは農業のことなどわからないけれど、農園もきちんと手入れされていると思う。家に入ると、柑橘の匂いがすぐに漂ってきた。入り口付近にレモンやオレンジが置いてある。色鮮やかで、質のいいものに見えた。

ロレッタは自分の見る目は確かだったと、満足げに笑みを浮かべた。

窓際の本の机には、農業の本や果物の成長を記録したノートが広げられていた。

細かく記された記録はまるで育種家いくしゅかのようで、レノスの果物への熱意が伝わってくる。

「……ふふふ。気に入ったわ。レモンは、こちらの籠いっぱいくださいませんか？ 色艶もいいし、これならレモネードがたくさん作れますわ。一緒にそちらのオレンジもくださいませんか？」

「も、もちろんです！」

レノスが嬉しそうに顔を綻ばせた。まるで、初めて商談が成立したような雰囲気だった。

「では、明日には私の別荘に届けてくださる？ 街外れの別荘なのですけれど……クロイツ公爵家の別荘だと言えはわかるかしら？ それとも、アルフレード様に、馬で案内をしていただきましようか？」

「だ、大丈夫です！ 街外れの別荘って、あの大きなお邸ですよ？ 白亜の壁の……見たことがあります！」

「そうですね。よろしく頼みますわね。お金は、ご希望の値段をおっしゃってくださいな。一括で用意しておきますわ！」

ぼったくりでもすれば、ただではすみませんけれど……なんてことは言わないで笑顔を見せれば、レノスも嬉しそうに頬を赤らめた。

「あ、ありがとうございます!!」

レノスは大きな買い物に驚きながらも、被っていた帽子を取り、両手で握りしめて丁寧にお礼を言う。

「では、また明日お待ちしておりますわ！」

「はい。お会いできて光栄です、奥様！」

ずいぶんと丁寧な挨拶をする子供こどもだと思えた。

まるで、貴族のような挨拶だった。

そんなレノスに見送られて、待たせていた辻馬車で街まで帰ると、待ち合わせ場所ではアルフレードが不機嫌そうに眉根を寄せて待っていた。

「お待たせしましたわ！」

「どこに行っていたんだ？ ずいぶん待った！」

腕を組んで、待ちかねたと不機嫌そのものを表すように足を揺らしていたアルフレードが、いつもと変わらない様子で辻馬車から降りてきたロレッタに問う。

「秘密ですわ。明日には、わかりますのよ！」

「なんでもいいから、大人しくしていてくれ！」

「私は、何もしてませんのよ？」

「ここはクロイツ公爵家の領地じゃないんだ」

「邪魔者は、排除しますわ」

「邪魔者はいないだろ……」

呆れた様子のアルフレードが腕を軽く開いた。ロレッタがそつとその腕に手を添えると、二人は歩き出す。

「あの女はどうなさいましたの？」

「仕事が終わったから、テルデイノス伯爵邸に帰った。やけに距離が近くて接しにくい……」

アルフレードは、困ったようにため息をついた。

「ため息なんて、珍しいですね」

「そうか？ ああ、でも、デートに行くのにつくものではなかった」

「デートですか？」

「俺はそう思っている」

ふーんと思いつながら、ロレッタはそつぽを向いた。すると、アルフレードが腕に添えられていたロレッタの手をそつと外し、きゅつと握ってくる。

「なんですか？ これは？」

「ロレッタは、目を離すとすぐにどこかへ行ってしまいうからな」

繋がれた手を見ると、ロレッタの胸があたたかくなった。こんな可愛い仕事など、自分には無縁だったからだ。考えてみれば、デートなんて言われたのは初めてかもしれない。

不思議な気持ちでアルフレードについていくと、劇場へ着いた。王都よりは小さいけど、それなりに大きな劇場の二階の特別席へと案内される。

一人掛けのソファアが二つ並んでおり、それぞれ座る。すでにワインも準備されており、落ち着いた空気の中で劇が始まった。

「……観劇は好きか？」

「ええ……静かに楽しめますからね。うるさいのは大嫌いなんです」

ソファアに肘をついて舞台を見下ろしていると、もう片方の手にアルフレードの手が重なっていた。

「今度は、オペラなどはどうだ？ 豪華客船でのオペラが人気らしいぞ」

「いいですね。船旅も趣きがありますわ」

「では、新婚旅行はそちらにするか？ すぐに行けなくてすまないが……」

「かまいませんわよ。毒殺未遂事件も解決しましたし……約束は守りますわ」

犯人を見つけたら離縁はしないと約束を交わした。アルフレードは、その約束通りに犯人を見つけてくれた上に、犯人の一人だったシンシアも助けてくれた。

もしアルフレードがシンシアをも罰そうとしたら、彼女を助けるために、アルフレードと敵対することも覚悟していたロレッタはひどく胸を打たれた。

……彼は、どこまでもロレッタの味方だったのだ。

「……アルフレード様。エリス様はもういいのですか？ 昔はよく二人で街に出ていたのではない

ですの？」

「……よく知っているな」

「昔、街で見かけたことがありましたわ」

今さら思い出したのか、と言いたげに呆れ顔を一瞬見せたアルフレードが、エリスを思い返し、ため息まじりに告げる。

「エリスは……昔からあのままだった。まだ子供だからだろうと思っていたが、成長しても彼女は変わらなかつた。そのせいも、一度も彼女を女性として意識したことはない。俺への好意がなければ、妹のように可愛がったかもしれないが……」

昔から純真無垢で気さくなエリスは、誰からも好かれやすかつた。でも、その笑顔の仮面の下はロレッタへの……アルフレードに近づく女への敵対心で溢れていた。その嫉妬心を焚きつけたのがロレッタの元カレ・アディルだった。

「……エリスが気になるか？ もう慰謝料代わりにうちの邸を渡す話もなくなつた。シャムロック男爵家の領地は半分以上がクロイツ公爵家のものになるから、シャムロック男爵家との関わりはしばらく続くが……」

シャムロック男爵家は、エリスが仕出かしたことへの慰謝料を支払うはずが資産が足りず、領地の半分以上をロレッタやクロイツ公爵家へ引き渡すことになつた。その手続きにしばらく時間がかかるらしい。

すでに、一部の領地の権利の変更は認められ、手続きが開始されていると今日届いた書簡に記さ

れていたという。

「……そう。柄にもないことを聞きましたわね」

「いや……たまには、そう話してくれると嬉しい」

「でも、もう私はエリス様など気にもしてませんわよ？」

あの女は毒を飲まなかつた。ロレッタにも、毒にも薬にも負けたのだ。ロレッタが気に留める必要も価値もなくなつたのだ。

そう思っていると、アルフレードが添えていた手を握り、そつと唇を這わした。

「ロレッタ。これを」

ロレッタの手に、アルフレードから贈り物がのせられた。

「私に？」

「君以外には、贈らない」

リボンのかけられた箱を開けると、赤い宝石が連なつたネックレスが入つていた。

「綺麗ですわ。ドレスに似合いそうですね」

ロレッタはさつそく首に着け、満足げに微笑んだ。

「ロレッタに似合うよ」

アルフレードの顔がそつと首筋に近づいてくる。そのまま彼の唇が触れ、くすぐつたい。

ロレッタはほんの少しだけ、アルフレードの胸板に手を添えた。男らしい筋肉質な感触にどきりとする。

「今も昔も、好きなのはロレッタだけだ」

突然の告白に、ロレッタは言葉が出ずに頬が紅潮してしまう。それに気づいたアルフレードは少しだけ笑みを零して、今度は唇にキスを落とした。



観劇後は、二人で軽く食事をすませて、テルディノス伯爵邸へ向かった。

ロレッタとアルフレードが夫婦で夜会に参加するのは初めてだ。クロイツ公爵家の馬車から降りる時にアルフレードが手を差し出すと、ロレッタは自然とその手を取った。

真つ赤なマーメイドラインのドレスをまとったロレッタを、アルフレードが大事そうに傍らに抱き寄せてテルディノス伯爵邸を見た。

「それにしても、なかなか大きな邸ですわね」

「テルディノス伯爵家は、代々続く名家だからな」

「テルディノス伯爵とは、お知り合いではなかったのですの？ 同じ王宮騎士団だと言っていましたわ」

「……いたかな？ テルディノス伯爵家の存在は知っているが、伯爵に会ったことはないはずだ。学生の時は、俺はずっと他国にいたし、早く国に帰りたくて飛び級で卒業したから、同年代ならわからないな。仕事も忙しくて、今は他人の現場を見ていないし……」

「テルディノス伯爵は、年上だと言っていましたわ」

「そんなことも言っていたが……覚えてない」

他人に興味がなさそうにアルフレードが淡々と話しながら、夜会の会場へと向かう。

「クロイツ公爵様ご夫妻です」

大広間の入り口から、テルディノス伯爵家の執事の案内で二人は会場へと入った。

美しく着飾ったロレッタを見て、周りの客たちは息をのむ。皆ひどく驚いた様子で、クロイツ公爵夫妻に注目している。

ロレッタとアルフレードが周囲の視線を集めている理由は、不仲だと噂の夫婦が腕を組んでやってきたからだ。二人で夜会に来たことなどなかったのに、と密やかに囁き合う声も聞こえた。

郊外の街にも、王都に勤めている貴族が多い。彼らがロレッタとアルフレードの噂を知っているも不思議ではない。

「まさか、クロイツ公爵にお会いできるなんて……光栄でございます」

アルフレードは挨拶にやってくる貴族たちにいつもの冷たい表情で返していた。

そんな挨拶を待つ人混みの中から、エミリアが親しげにアルフレードに声をかけてくる。

「アルフレード様。来てくださったのですね」

「招待、感謝する。ルースにも挨拶をしたいが、どこにいるだろうか」

「テルディノス伯爵も、ご挨拶で忙しくしていらっしゃいましたので……」

「そうか……」

質問に答えてもらえず、アルフレードは困ってしまう。

「ああ、そろそろダンスが始まりますわ。ねえ、アルフレード様」

エミリアが誘ってほしそうに、アルフレードに艶めいた視線を送る。

アルフレードがエミリアとダンスをする理由がないので断ろうとすれば、ロレッタが会話に割り込んだ。

「私は、今夜はダンスの気分ではなくてよ。ダンスをしたいなら、一人ですればいいじゃない」

「お・だ・ま・り！ 誰が好き好んで、あなたと私がダンスすると思うのよ！ ダンスがしたいなら、あなたが一人でしなさい！」

「あなた、しつかりなさってちょうだい」

「何をよ！」

「私に命令するなんて、死んでも知らないわよ。私を誰だと思ってるの？」

「変人とは思えないわ」

ロレッタとエミリアのやり取りに、アルフレードが困惑する。

「ロレッタ……もしかして怒っているのか？」

アルフレードは、まさかロレッタは嫉妬しているのかと勘繰る。そうだとしたら少し嬉しいと期待を込めて。

「だけど、ロレッタは気にする素振りもなく悩ましげに答えた。

「まったく怒ってはいませんが、鬱陶うつとくしいので記憶から消し去ろうとしていますわ」

「失礼よ！」

すると、エミリアは入り口からメイドに呼ばれていることに気づいた。

「あら、呼ばれたみたいですね。せっかくアルフレード様にお会いできて残念ですけど、これで失礼しますね」

「ああ、君も忙しいみたいだな」

「ええ、これでも使者団の責任者ですから……せっかくお会いできたのに、残念ですね。それでは」

エミリアはそっとドレスをつまんで、礼をして去っていった。

「うるさい女でしたわね」

ロレッタが面倒くさそうに呟くと、アルフレードは額に手を当てる。

「忙しいと言っていただろう。もう、今夜は戻ってこないんじゃないか？」

「目当てがここにいるの？」

「俺を目当てにされては困る……」

ふと自分に向けられる視線に気づいたロレッタが振り向くと、指の間からアルフレードがロレッタを見つめていた。

「……どうしましたの？」

「いや、すごく綺麗だと思って……」

「まあ、お世辞が言えるようになりましたのね」